
 私がなぜ現在の科目を選んだか

「産科婦人科」

信州大学産科婦人科学教室

品川 真奈花

私の実家は急カーブの道路に面しており、幼少期には交通事故が頻繁に起きていました。看護師の母は、事故が起きるとすぐに現場に駆け付け、傷病者の容態を確認し、救急隊に引き継いでいました。30数年が経ち、今ではまっすぐに整備されたその道を車で走りながら、私が医療従事者を目指す原点となった母の姿を思い出します。

中学校の授業で見た胎児の成長過程と出産のドキュメント映像に心を突き動かされ、“お産”の現場で働くことに強い憧れを抱きました。17歳、胃腸炎で入院した際には偶然にも妊娠中の方と同室になりました。カーテン越しに、我が子を思い不安で涙する声を聞き、「将来は患者さんの不安に寄り添える産婦人科医師になる」と決意しました。医学部に入学後も、産婦人科一筋で突き進みました。生命誕生の喜び体験実習、自主研究演習、選択臨床実習など、産婦人科で学ばせていただける機会は全て逃しませんでした。

 私がなぜ現在の科目を選んだか

「麻酔科蘇生科」

信州大学医学部麻酔蘇生学教室

吉田 倫 将

私たちの世代は新型コロナウイルス感染症の流行と同時に初期研修を開始しました。歓迎会などの交流の機会が限られる中で、診療科の面白さは実際の研修内容の中で感じ取る部分が大きかったように思います。私は初期研修1年目を信州大学医学部附属病院で行い、循環器内科、腎臓内科、呼吸器内科、血液内科、産婦人科、小児科、救急科、麻酔科などをローテーションしました。学生時代には講義や国家試験の勉強を通じて強い関心を抱くことはありませんでしたが、実際に臨床を経験する中で最も興味を持ったのが麻酔科でした。静脈路や動脈路の確保、気管挿管といった手技に加え、経験を重ねるにつれて術中の麻酔管理を任せていただけたことが大きなやりがいとなりました。特に循環作動薬の投与に対して数秒で生体反応が現れる場面は印象的であり、循環を維持しながら鎮痛・鎮静の管理をするという、即時性のある介入に強い魅力を感じ

ところが、臨床研修医となると一変します。自分を医師として見てくださる患者さんを前に、各診療科の先生方と真剣に議論をしながら診療に携わるようになると、全ての科に魅力を感じたのです。特に消化器内科では超音波や内視鏡に没入し、本気で入局を検討していました。

最後の思い出に、と研修医2年目で参加した日本産科婦人科学会学術講演会。課題を克服し生児を得た症例や婦人科悪性腫瘍に対する治療の進歩などの発表を聞き、産婦人科への憧れが一気に舞い戻りました。さらに、学生時代にお世話になった信州大学の先生方に温かく声をかけていただけたこともとても嬉しく、「この先生方と働けたらどんなに幸せか」と感じました。診断から治療、その後の生活まで、出会った患者さんにずっと寄り添い続けられるこの診療科で働きたい。そして、信州大学の先生方と働きたい。学会場で入局を決意しました。

冒頭に登場した母は今年で68歳、自らも病と闘いながらも、未だに看護師として患者さんに寄り添い続けています。医療従事者として最も尊敬する母の姿を目指し、産婦人科医師として生きることを選んだこの人生を、大切に歩み続けたいと思います。

(信大平25年卒)

 じ、麻酔科を志す契機となりました。

2年目は相澤病院で研修し、救急科や内科への進路も考えましたが、侵襲的な処置を麻酔によって患者の苦痛を軽減しながら安全に実施できる点、さらに麻酔薬の選択やモニタリングの内容や方法、術後鎮痛法など周術期管理に多様な選択肢があり、適切に行えば高い自由度で医療を提供できる点に惹かれ、麻酔科を志望しました。

麻酔科医の活躍の場は、手術室にとどまらず、集中治療、ペインクリニック、さらには緩和医療の領域に広がっています。麻酔科専門医試験を合格後の現在はサブスペシャリティとして緩和医療を選択しました。心臓血管麻酔や小児麻酔など麻酔そのものを極める道もありましたが、研修医時代から関心のあった領域であり、手術室の外でも患者に関わることができる点にやりがいを感じ、緩和ケアセンターで研修を行なっています。このように周術期のみならず幅広い領域で活躍できることも麻酔科を志した理由の一つです。本稿が、これからの進路を考える後輩の皆さんにとって、麻酔科という選択肢に関心を持つきっかけとなれば幸いです。

(信大令2年卒)